SPORTS　FOR　ALL　～　スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に　～

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS
Vol.184　/　2021 .AUG
（月1回発行）

聖光学院高校(福島)と連携協定/スポーツで人材育成

左から聖光学院の新井校長と本学の髙橋学長

本学は8月23日、福島県にある私立・聖光学院高等学校(伊達市)とスポーツを通じた学校教育、学術振興や人材育成を目的とした連携協定を結びました。

本学が持っている知的資源(研究内容)、人的資源(人材)、物的資源(施設・設備)を積極的に開放し、地域における生涯学習やスポーツの発展に寄与することの使命と、聖光学院高が令和4年度に新設するスポーツ探究コースの充実を図ることなどが協定の主な目的です。

締結式は聖光学院高校で行われ、本学からは髙橋仁学長、森本吉謙副学長、江尻雅彦教授らが出席。髙橋学長は「生徒の皆さんの学びを深められれば」と述べ、聖光学院高校の新井秀校長は「スポーツに関する技術だけでなく、人間力の育成にも取り組んでいきたい」と期待を込めました。

今後は、本学教員が講師となって専門的な学習の提供や、部活動での合同練習などを行っていく予定です。

〈 目　次 〉

・聖光学院高校(福島)と連携協定/スポーツで人材育成	1
・「体育」に想う	2
・日本初のメダル「銀」／佐々木琢磨職員、世界デフ陸上100M ・7年ぶり全日本インカレ出場へ／東日本ブロックV／男子ハンドボール部	3
・南蔵王チャレンジキャンプ実施報告	4
・亀山選手、健闘5位／堂々の演技は本学の誇り ・感慨深く凱旋報告会／ありがとうベラルーシ新体操チーム ・金賢植准教授の研究を助成/宮城県公衆衛生研究基金	5
・体操・南一輝（体育4年）が、2021プロ野球エキシビジョンマッチで始球式 ・令和3年度SD研修会をオンラインで開催 ・中学生たち、本学を「総合学習」で斬る／地域連携とは？	6
・芝草通信　NO. 28	7
・「高校スポーツの安全を守る」Vol.40	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課
直通　0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

初寄稿シリーズ

「体育」に想う

重巣　吉美　教授（令和3年4月 着任）

私が生まれて小学生から高校生の頃、昭和30年後半から50年前半は、今の環境とは違い、スポーツの環境はまだまだ整っていませんでした。「スポーツ」とか「競技」という概念より、「運動」か「遊び」だったように思います。

小学生当時の記憶がはっきりする小学校4年生頃から振り返ってみますと、私は「体育」の授業が好きでした。なぜかというと、とても単純です。それは、体育の授業での実技がうまくできたからです。走ったり、跳んだり、投げたり、泳いだり・・・だから、楽しかったのです。もっともっとできるようになりたいと思っていました。

中学校へ行っても同様でした。大概のものはできました。特に、陸上では、短距離走が得意でした。100Mやハードル走も楽しく走れていました。小学生が出場する競技会は全くありませんでしたが、中学校には中学校総合体育大会がありました。校内陸上大会を経て、地区大会に出場しました。中学3年生の時には、400Mリレーで地区大会1位となり県大会へ出場できました。県内でも大きな陸上競技場で走れること、未知の世界へ踏み出すうれしさを感じました。当時は、土のトラックでピンの長いスパイクで走っていました。もちろん、陸上専門の先生が指導してくださるわけでもありませんでした。ですから、県大会で、陸上指導を受け、素晴らしい走りをする同じ学年の人たちがいることを知り驚きました。

高等学校へ行っても「体育」の授業は好きでした。女子校で体育を嫌がる人もいましたが、中学校よりも多様な種目を授業の中で体験できました。そして、高校からスタートできるチームスポーツのハンドボール部に入部して部活動を始めました。練習は、短時間でしたが、とても厳しかったです。当時は、毎日外のコートで練習ですし、ルールもひと昔前のものでした。真っ黒になって、軽い熱中症になりながらも走り続けました。インターハイの東北大会には毎年、そして、全国大会には1度出場しました。そんなこともあり、保健の授業も含め、小学校から高等学校までの「体育」の成績だけはオール5でスポーツテストはAの1級でした。「できることは好きにつながり、好きなことはできることにつながる・・・」を体験したのだと思います。

プチ自慢となってしまいましたが、ここ仙台大学では自慢にも何にもなりません。そんな方ばかりが集まっているのですから・・・いかに狭い世界で生きてきたのかがわかります。けれど、小学生から高校生までの期間、「体育」の授業が好きになれたことは、その後の私が生きる中で少なからず影響を及ぼしていたのは確かだと思っています。

今、仙台大学との縁をいただけたことに不思議な気持ちがしています。

ボッチャ体験の様子

「体育」の好きな子どもたちを増やす学校を目指して取り組んできました。

休み時間、鉄棒練習に励む児童たち

日本初のメダル「銀」／佐々木琢磨職員、世界デフ陸上100M

日本デフ陸上競技協会提供

本学の佐々木琢磨職員（27）は8月24日、ポーランド（ルブリン）で開催された第4回世界デフ陸上競技選手権大会・男子100Mに出場し、10秒67（追い風1.6m）をマークして2位表彰台に上がりました。日本人として同種目初のメダリストとなります。

佐々木琢磨職員コメント

これまでの私だったらメダルを獲ることは厳しかったと思いますが、ここまで名取英二教授（仙台大学陸上競技部部長、元400M日本記録保持者）の指導を受け、細かい動きやレースの流れなど、正しい走り方を意識できるようになれた結果、銀メダルを獲得できました。

今回のレースで課題も更に明確になりました。デフリンピックで世界一になるため、更に努力をし続けます。

7年ぶり全日本インカレ出場へ／東日本ブロックV／男子ハンドボール部

男子ハンドボール部は、8月10～12日に仙台市のカメイアリーナで開催された東日本学生ハンドボール選手権大会　（東日本インカレ）でブロック優勝し、全日本インカレへの出場権を獲得しました。

全日本インカレへの出場は2014年以来7年ぶり、東日本インカレを勝ち抜いての出場権獲得は2004年以来17年です。

今大会は各ブロックによる総当たり戦形式で行われ、本学は2戦全勝としました。

結果は以下の通り

仙台大学　　22　対　21　信州大学

仙台大学　　47　対　21　北星学園大学

全日本インカレは11月6日から山梨県甲府市で開催されます。引き続き男子ハンドボール部の応援をお願いします。

＜男子ハンドボール部＞

左サイドからシュートを放つ
板倉暖人（体育学科3年）

カットインシュートを放つ
村上雄介（体育学科2年）

南蔵王チャレンジキャンプ実施報告

仙台大学体育学部　講師　井上　望

8月4～8月10日にかけて、6泊7日の南蔵王チャレンジキャンプを行いました。このキャンプは井上望研究室を母体とした「仙台大学野外運動研究室」という任意団体が主催しており、国立青少年教育振興機構より「子どもゆめ基金」の交付を受けて開催している事業です。コロナ禍であることから参加者の募集や開催に際して不安がありましたが、15名の子どもたち（小学校5年生～中学校2年生）が参加をしました。

薪割りも一苦労。鍋捌きも大切だけど、まずは火をつけないと…

キャンプ初日と2日目は晴れ間が見え、快適にキャンプ生活をする事ができましたが、3日目以降は連日の雨でプログラムを柔軟に変更しながら実施しました。なお、プログラムは冒険教育の理論に則り、「アドベンチャーウェーブ※」を意識しながら大学院生が中心となり企画、展開し、メインとなるプログラムは「１泊登山」でした。キャンプ場でテント生活をする事自体が初めての子どもたちもいる中、テントを自分たちで担いで登山をして、山中で１泊をしてキャンプ場に戻るという普通のキャンプではできない体験をしました。さらに登山の2日間は台風の影響もあり、雨風共に強く、良いコンディションではありませんでした。しかし、誰一人として脱落する事なく、決められたコースを最後まで歩く事ができました。歩いている最中に班のメンバーと励まし合っている姿はとても印象的でした。登山後は、さらに絆が深まり、最終日には、キャンプ生活を共にした仲間たちを別れる事が辛くて、感極まって泣き出す子どももいましたが、かけがえのない良い体験を提供できた証拠なのではないかと思います。

自分と同じぐらいの大きさのリュックを背負って歩く子どもたち

上記のように成功裏に終わる事ができたのですが、徹底した感染対策とスタッフ（ゼミ生）の働きがなかったらかなわなかったのではないかと思います。特に感染対策については例年には無い事でしたが、子どもたちの直接指導にあたるスタッフが子どもたちの様子を毎晩「カウンセラー報告」の中でより詳細に報告するとともに「全員の朝昼晩3回の検温と体調チェック」を徹底し、少しでも体調が悪い子どもやスタッフがいないか常に確認できる体制をとりました。

このキャンプがスタッフの野外教育指導者としての教育を兼ねているとは言え、黙々と感染対策とキャンプ活動に取り組んでくれた事については、感謝の言葉しかありません。

最近では、新型コロナウイルスがデルタ株に置き換わりつつあるため、今後、このような野外活動を開催する事も難しい状況になることも考えられますが、子たちの笑顔や保護者の方々からの要望に応えるためにも、どうやったら実施できるかをよく考えながら取り組んでいきたいと思います。

来年はコロナが終息して、制限なくキャンプができますように

※アドベンチャーウェーブとは、野外教育の一つである冒険教育を行う際に用いられる理論の一つです。冒険教育を効果的に実施するためにプログラムを組む際に全日程の中間にメインプログラムを配置し、その前でメインプログラムへの準備、その後でふりかえり、日常への適応を目的としてプログラミングする手法。

亀山選手、健闘5位／堂々の演技は本学の誇り

東京五輪の体操競技に出場した本学OB亀山耕平選手（徳洲会、2011年体育学科卒業）は8月１日、男子種目別あん馬の決勝に臨み、表彰台こそ逃しましたが堂々の5位入賞を果たしました。持ち味の雄大な旋回を見せる演技は健在で、世界に改めて「カメヤマ」の名を強く印象付けました。

亀山選手は「あん馬のスペシャリスト」として本学卒業後の2013年に世界選手権種目別を制した経歴を持ちます。今回の東京五輪には個人枠による出場権を獲得し、32歳にして自身初のオリンピックに挑戦となりました。

1日、本学は学内LC棟に教職員と学生有志が大型スクリーンで観戦し声援を送りました。

試合後の翌２日には亀山選手から髙橋仁学長に電話が入り、「応援ありがとうございました。（五輪での演技は）最高に幸せでした」と話してくれました。コロナ禍が収まった後に本学を訪れるということです。

感慨深く凱旋報告会／ありがとうベラルーシ新体操チーム

東京オリンピックに出場したベラルーシ新体操ナショナルチームの凱旋報告会が8月10日に本学第4体育館で行われ、足掛け5年にわたる交流の大団円を迎えました。「ありがとう」「また会いましょう」。関係者一同、感謝と惜別の思いが交錯しました。

チームへの「おもてなし」は白石市と柴田町がホストタウンとなっており、本学は2017年から2019年にかけて学内施設を練習会場として提供してまいりました。しかし、コロナ禍の影響で様相は一変。大会直前の合宿も白石市のホワイトキューブに集約して行わざるを得ませんでした。

山あり谷ありを経て臨んだ五輪。チームは個人種目で銅メダル、団体5位入賞という輝かしい成績を収めました。拍手と賛辞に包まれた凱旋報告会ではまず、事前合宿招致推進協議会の会長を務める朴澤泰治理事長が「今回の成果は皆さんの努力の賜物です。イリーナ・レパルスカヤ・ヘッドコーチ（HD）も大変お疲れさまでした」とたたえ、レパルスカヤHDには仙台たんすを、選手たちにはこれまでの合宿の様子を収めた映像と本学タオルを贈りました。

これに対しレパルスカヤHDは交流の歩みを振り返りつつ、「5年間の事前合宿が今回の結果につながりました。これまで関わったすべての方々に感謝します」と笑顔で締めくくってくれました。

金賢植准教授の研究を助成/宮城県公衆衛生研究基金

金賢植 准教授

このたび、金賢植 准教授が研究している「宮城県の子どもにおけるCOVID－19流行前・中の生活習慣や身体状況からみた健康管理上の課題」が、令和３年度宮城県公衆衛生研究基金の助成を受けることになりました。

この研究は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行前・中の子どもたちの生活習慣（身体活動・スクリーン視聴・睡眠）と身体状況（体力・運動能力）の実態を把握し、コロナ禍の中で子どもたちが抱える健康管理上の問題点を抽出し、その改善方法を検討します。本研究の成果は、今後宮城県の子どもたちが健康な生活を送る上で一つの指標になるものと期待されます。

＜学術会事務課＞

体操・南一輝（体育4年）が、2021プロ野球エキシビジョンマッチで始球式

体操競技部の南一輝（体育4年）が8月4日仙台市宮城野区の楽天生命パーク宮城で行われた、楽天イーグルス対東京ヤクルトスワローズの2021プロ野球エキシビジョンマッチで始球式を務めました。

同部のユニフォームでマウンドに上がった南一輝は、緊張しながらも力強い投球を見せ、会場を沸かせました。

初めての体験に南一輝は「体操以外のスポーツを体験できたことはとても貴重な経験となりました。改めてスポーツの楽しさを感じました」と笑顔で話してくれました。

同選手は体操競技の全日本種目別床運動で3連覇を成し遂げており、10月18～24日に北九州市で行われる体操の世界選手権代表にも選ばれています。

令和3年度SD研修会をオンラインで開催

本学園では、教職員の職能開発向上等を目的として、毎年SD研修会を開催しております。

今年の研修会は、8月11日の午後から、コロナ禍における感染防止の観点から昨年同様、オンラインでの開催で、川平及び船岡両地区合わせて159名の教職員が参加して行われました。

朴澤理事長による訓示の後、宮城県総合教育センター情報教育班の主幹(指導主事)山下学氏に『新学習指導要領とICT活用』という演題でご講演をいただきました。新学習指導要領による目指すべき姿と、そのためのICT環境整備の在り方などについて学ぶことができ、大変有意義な研修会となりました。

研修会で得た知識を活かしながら、学生が、より安心した学生生活を送ることができるように、教職員一同、引き続き、質の向上を目指して、社会の期待に応えられる学校運営に取組んでまいります。

中学生たち、本学を「総合学習」で斬る／地域連携とは？

本学の教職員から説明を受ける北海道教育大学附属函館中の皆さん

本学の教学組織であるスポーツ健康科学研究実践機構は8月18日、北海道教育大学附属函館中学校の生徒4人の訪問を受け、同機構が掲げる地域連携の実態や社会貢献の考え方について尋ねられました。この訪問は、仙台市への修学旅行と組み合わせた探求学習「総合的な学習の時間」の一環です。スポーツを軸とする本学の取り組みが少しでも理解してもらえたのではないかと思います。

4人はいずれも3年生。ホームページで「地域連携」をキーワードにさまざま検索したところ、本学のスポーツ健康科学研究実践機構を知ったそうです。事前に質問事項をメールでやり取りし、訪問当日は新聞記者さながら熱心な「取材」でした。40分間、「地域連携を進めるうえで（大学の都合だけでなく）相手方の気持ちをどう酌むのかも大事だと思う。どのようにやっているのか」といった突っ込んだ質問なども受け、「相手方と連携協定を結ぶ際は事前に十分に話し合って進めている」と返答。

機構側も地域連携の事業を進めていく際の「姿勢」が改めて問われている、と感じ入りました。

北海道教育大学附属函館中の皆さん、大変お疲れさまでした。

＜スポーツ健康科学研究実践機構＞

芝草通信　NO. 28

担当　：体育施設管理コンサルタント　小島文雄

ムクドリの大量飛来について

7月12日に第二グラウンド、ラグビー場・アメリカンフットボール場にムクドリの大量飛来を確認しました。普段目にしても数匹程度のムクドリが100匹近い大量の飛来は何を示しているのかといえば、シバツトガやヨトウ（ガの一種）の幼虫が卵から孵化して芝生の中や地表面を動き回っていることを示しています。鳥の目は人間よりも優れた能力が有り高いところからでも幼虫の存在を察知します。

幼虫が大量発生すると数にもよりますが、一昼夜で芝草の根元や茎葉部を食害しますので、大変な被害になります。常日頃シバツトガ・ヨトウ成虫の飛来数を観察したり、幼虫の存在を観察したりしますが、なかなか分かりません。ムクドリの大量飛来は幼虫発生のバロメーターになりますので、すぐに防除作業として殺虫剤の散布を行います。成虫は日中かん木などの陰に潜んでいるが、夕方から夜間にかけて芝草に産卵します。第１化期は約5～6週間であり、年3～4回発生するとみられています。春先の幼虫は小さくて食欲もありませんが夏頃には、成長して食欲旺盛になり食害が大きくなります。

初期の頃は幼虫の発生に気付くのが遅かったり、外注企業から借り受ける機械の手配に手間取ったりして大きな被害にあった時もありました。現在はワークマンという汎用性の広い小型トラックが有り、運搬台車や液剤散布のタンク車や砂散布機等アタッチメントの交換で色々な作業がオートマチックで行える機械が役に立ってます。害虫発生の駆除対策に常時タンク車に交換して準備しています。

7月14日に実施した薬剤散布の状況を写真で説明します。

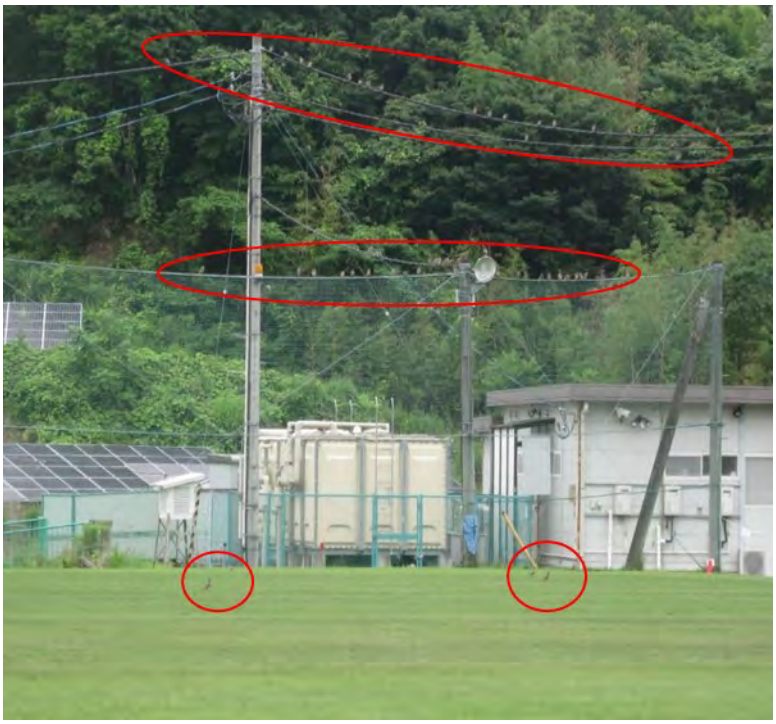

写真1　　ムクドリの大量飛来

電線に多数止まっているムクドリ（赤丸印）。警戒心の薄い一部は芝生表面に降りて幼虫を食べている。

写真2　　薬剤散布状況
タンク車の右側に伸ばしたアームから散布中、先端から白い泡を出してマーキング（赤丸印）
殺虫剤：フルスイング、殺菌剤：ランマン

写真3　　タンク内水洗い状況
タンク車の両側に伸ばしたアームと車幅のセンターアームから一斉にタンク車内の水を散水して洗浄中（薬剤散布と同じ状況）

写真4　　薬剤散布完了後
ムクドリは全数退避

写真5　　全景
ラグビー・アメリカンフットボール場

（8月27日　記）

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol.40

担当：浅野 勝成 助手

高校は約1ヶ月の短い夏休みが終わりました。私自身は1ヶ月も休んでいる訳ではないのですが、もっと欲しいな～と思ってしまい、子どもの頃と変わらないなと感じます。子どもの頃は遊ぶ時間が欲しいという理由でした。今では、夏の間で成長する生徒が多く（私自身の経験）、そこにトレーニング指導という立場で携わることが出来るので、毎年の夏休みがとても楽しみです。今年の夏もいくつかの成長が見られたので、それを紹介します。

まず、夏のトレーニング指導では熱中症予防や汗で床や器具が滑ることによる事故の防止を念頭に置きました。汗で床が滑りやすい状況下でジャンプトレーニング等を行うと、怪我に繋がる可能性が上がるからです。S&Cコーチとして、トレーニング開始前に床のチェックは毎回欠かさず行います。一方で、トレーニング中の安全管理も生徒達に学んでほしいという想いもあります。夏休み当初は、口頭で指示や注意点を生徒達に伝えてきました。継続して伝えてきたからなのか不明ですが、雑巾をいつもより多く準備する、セットが終わったら器具だけでなく床も拭く、ジャンプトレーニングする前には床の滑り具合をチェックする、滑りやすい箇所があればコーンを置いておく、などのような自発的な行動が生徒達から見られました。結果として、今年の夏休みもトレーニング中の事故は起きませんでした。これは生徒達の成長の賜物と思います。

二つ目に、男子バレーボール部に対して新たな取り組みを行いました。ある日のトレーニングで1・2年生が練習試合で、3年生のみという日がありました。どうせ3年生のみだからという理由で、これまでのトレーニングや授業を通して学んだことを活かして、自分たちでウォームアップを考えてみようという時間を設けてみました。９名全員が静的もしくは動的ストレッチとダイナミックウォームアップをそれぞれ１個ずつ考えて説明そして実践するという流れにしました。また、同じ部位や動作を行わないという制限も設けました。結果として、個々が考えた種目を繋げてみると低強度の静的ストレッチから始まり、最後はアジリティ要素を含む全力ダッシュで終えたので、理想に近いウォームアップを生徒自らが作成そして実践できたのではないかと思いました。生徒たちが日々の学びをアウトプット出来たことに嬉しく思いました。

今後もS&Cコーチとして生徒達の成長をサポートできることに喜びを感じつつ、日々の指導業務に精進していきたいと思います。

写真１．足関節ストレッチの様子

写真２．太もも裏のストレッチの様子

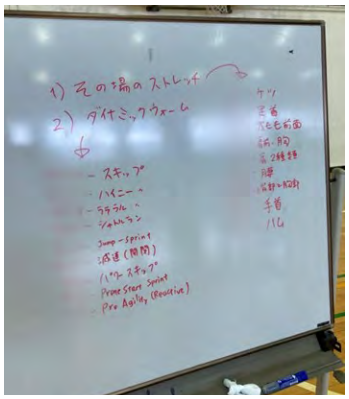

写真３．生徒考案のウォームアップのプログラム